

# 基礎学力、専門教育、 進路指導の充実を図り、 地域を支える人材を育成

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 地域の中学生の人口が今後急減していく中で、地域に選ばれる学校となるため、魅力的な学校づくりに着手

### 実践内容

#### 出雲農林高校魅力化構想

- 校外の有識者を交え、魅力的な学校づくりを検討。「基礎学力の充実」「専門教育の充実」「進路指導」を柱とする方針を決定

【サイエンスアプローチ】 基礎学力の定着を図るための学校設定科目。3年間を通して段階的に学び直しを継続

【課題研究】 地域の農業に関連する探究活動。大学や研究機関、地元企業とも連携し、専門性の高い研究に取り組む

1年生からの進路指導 生徒の進路の視野を広げ、高い目標を持たせるために、進路検討会と面談を実施

### 成果と展望

- 募集定員の上限まで生徒を確保できている
- 基礎学力と専門性を身につけた生徒が育ち始め、進路実績も上向きに

## PROFILE



島根県立今市農業学校として開校。校訓に「耕魂 育命」を掲げる。2016年度に文部科学省から「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の指定を受け、基礎学力の定着に向けた指導のあり方や教材開発を進めている。

設立	1933（昭和8）年
形態	全日制／植物科学科・環境科学科・食品科学科・動物科学科／共学
生徒数	1学年約160人
2016年度進路実績（現役のみ）	国立大は、島根大に2人が合格。私立大は、酪農学園大、東京農業大、武庫川女子大、南九州大などに延べ10人が合格。短大、専門学校進学64人。就職75人。
住所	〒693-0046 島根県出雲市下横町950
電話	0853-28-0321
Web site	<a href="http://www.izuno.ed.jp">http://www.izuno.ed.jp</a>

## 従来の活動の発展と 新たな活動の推進を目指す

島根県立出雲農林高校は、2015年度、学校改革に向けて大きく舵を切った。そのきっかけは、地域の少子化が深刻さを増していることだ。佐藤睦也校長は次のように語る。

「本校は県内唯一の農業専門高校であり、地域の農業や農業教育を支える人材を育成する使命があります。生徒や保護者に信頼され、選ばれ続ける学校であるためには、従来の活動を発展させるとともに、新たな活動も推進していく体制づくりが必要だと考えました」  
そこで、農業関連の研究機関や民間企業の職員といった校外の有識者で構成される出雲農林

\*プロフィールは2017年3月時点のものです

高校魅力化推進委員会を設置。同校の現状や課題、改革案を委員に討議してもらい、その結果を基に「出雲農林高校魅力化構想」(図1)を打ち出した。柱として位置づけられたのが、「基礎学力の充実」「専門教育の充実」「進路指導」の3つだ。吉岡正弘教頭は次のように説明する。

「専門的な学びを深めるためには、普通教科・科目の学力を定着させておかなければなりません。また、生徒個々の能力や適性を把握し、その可能性の伸張を図るためには、1



島根県立出雲農林高校校長  
**佐藤睦也** さとう・むつや



島根県立出雲農林高校教頭  
**吉岡正弘** よしおか・まさひろ



島根県立出雲農林高校  
**川上弘** かわかみ・ひろし



島根県立出雲農林高校  
**曾田稔** そだ・みのる



島根県立出雲農林高校  
**黒崎千春** くろさき・ちはる

教職歴28年。同校に赴任して5年目。教務主任。「すべては生徒のため」という信念で教育活動に取り組んでいきたい」

年生から十分に生徒の進路適性を検討することが必要です。3つの柱それぞれを充実させながら、関連づけの強化を目指しています」

### 学習に対する生徒の自信を高め、知的好奇心を育む

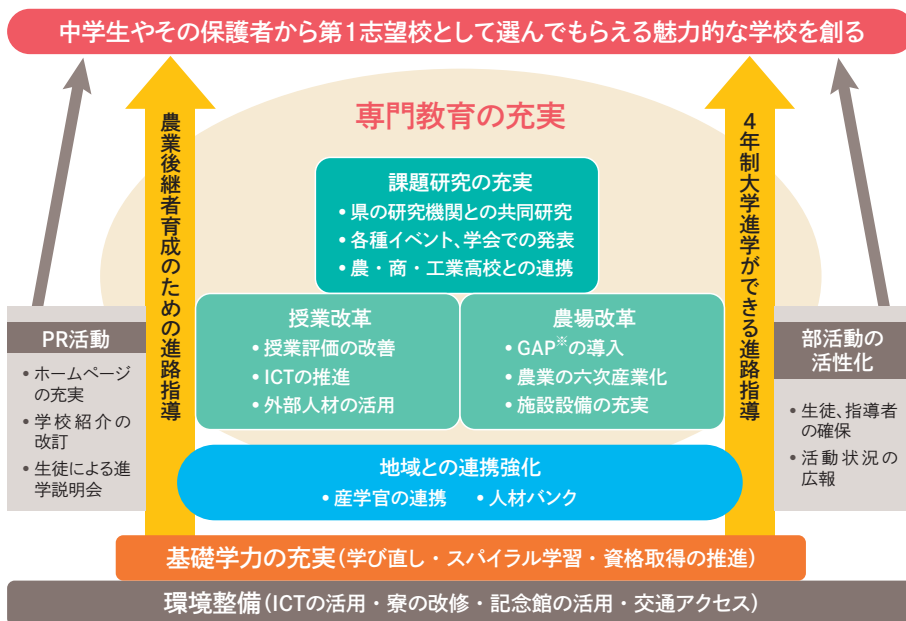
1つめの柱となる「基礎学力の充実」の中核となる活動は、学校設定科目「サイエンスアップローチ」(以下、「SA」)だ。3年間を通して段階的に学び直しを進める。16年度の1年生では、数学と英語でベネッセの「マナトレ」(※1)に取り組ませた。「マナトレ」は家庭学習などの教材として以前から用いていたが、数学と英語を苦手とする生徒が多いため、「SA」で導入。問題演習・自己採点に加え、教師が解説も行うことにした。学習の成果は著しく、ベネッセの「基礎力診断テスト」(※2)の結果では、GTZ(※3)がDゾーンの子は半数近く減った(P.38図2)。

また、1年生の「SA」では、学び直しを進める一方、2年生から始まる「課題研究」の準備にも取り組む。「課題研究」では、農業に関する専門的な研究を行うため、研究テーマの設定の仕方や文献の調べ方といった基礎的な事項を「SA」で

身につけさせたいと考えた。教師による指導のほか、大学や研究機関の研究者を学期に1回招き、研究とは何か、地域が今どのような課題を抱えているかなどについて講演してもらおう。1年生の「SA」に2つの役割を担わせる意図を、教務主任の黒崎千春先生は次のように語る。

「生徒は学び直しによって、『やればできる』という手応えを感じ、前向きに学習に取り組

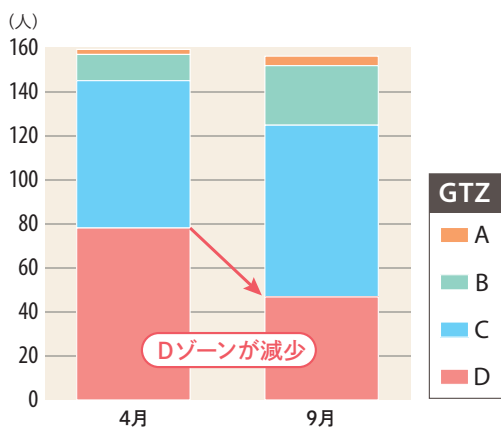
図1 「出雲農林高校魅力化構想」の概念図



※ Good Agricultural Practice。農業生産活動の各工程の正確な実施、記録、点検及び評価を行うことによる持続的な改善活動。 \* 学校資料を基に編集部で一部改編

\* 1 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。 \* 2 GTZ (学習到達ゾーン) という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性 (自我同一性) を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。 \* 3 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S 1」～「D 3」の15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A 2」～「D 3」で評価される。

図2 2016年度1年生における「基礎力診断テスト」の成績推移



\*学校資料を基に編集部で一部改編

2つめの柱となる「専門教育の充実」では、「課題研究」を重視する。生徒が個人またはグループで地域の農業にかかわる研究テーマを設定し、全校生徒や保護者が集まる校内発表会など

### 校外の機関と連携し 高い水準の研究を推進

「資格を取得すれば、就職や進学に有利になるだけでなく、学習に対する自信も高まります。生徒には、『高いと思っていたハードルも努力で乗り越えた』という成功体験を多く積んでほしいと思っています」(黒崎先生)

ら推奨している。並行して『課題研究』への意識づけを重ねて生徒の知的好奇心を高め、『専門教育の充実』につなげたいと考えています。また、各種検定試験に向けた学習も1年生から推奨している。

基礎学力と思考力・判断力・表現力を高める

### 生徒が考える時間を増やし、 知識を活用する力を高める

「時間と情熱をかけて取り組んできたテーマであるだけに、生徒は堂々としています。日本砂丘学会全国大会では研究者から次々と鋭い質問をされたのですが、生徒はしっかりと受け答えをしていました」

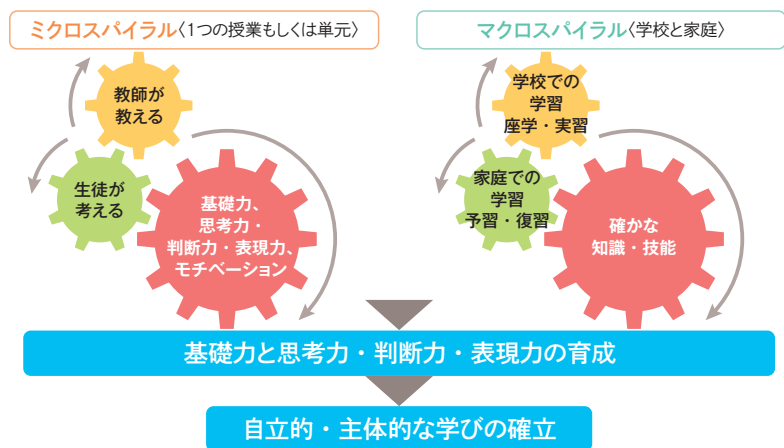
農場長の曾田稔先生は、校内外の発表の場に立つ生徒の姿を見て、成長を実感すると話す。

また、植物科学科のグループは、地元の建設コンサルティング会社と連携し、海浜植物「ハマボウフウ」の移植によって、海岸の砂の浸食を食い止める研究を行っている。研究内容は日本砂丘学会全国大会で発表し、最優秀賞を受賞。さらに、日本学校農業クラブ全国大会のプロジェクト発表でも優秀賞を受賞した。

例えば、動物科学科のグループは、絶滅が危惧されている地鶏「出雲コーチン」の種卵を鳥根県畜産技術センターに提供してもらい、その孵化と飼育に取り組んでいる。この研究は同県庁も注目しており、鳥根県と連携して育種に取り組み予定だ。

で研究内容のプレゼンテーションを行う。活動自体は以前から行われているが、「出雲農林高校魅力化構想」によってテーマの幅を広げ、研究機関や企業との共同研究が増えた結果、従来以上に研究の専門性が高まっている。

図3 「スパイラル学習」の概念図



\*学校資料を基に編集部で作成

ために、「スパイラル学習」(図3)を進めている。「スパイラル学習」は、「マクロスパイラル」と「ミクロスパイラル」からなる。「マクロスパイラル」とは、座学と実習、授業と家庭学習を有機的に結びつける指導法で、知識・技能の定着を促すねらいがある。「ミクロスパイラル」とは、1つの授業もしくは単元に、教師が教える時間と生徒自身が考える時間をつくる授業法で、知識を活用する力を伸ばすために取り入れられている。つまり、「マクロスパイラル」「ミクロ

スパイラル」とともに、生徒がインプットとアウトプットのサイクルをしっかりと回し、より高い学習目標の達成を目指すことになる。

定期考査でも「スパイラル学習」を重視し、思考力・判断力・表現力を見る問題を全教科・科目で出題して評価している。

「自分で学びを深め、考える習慣を1年生のうちから身につけることで、答えが1つではないテーマに挑むことになる『課題研究』にも、取り組みやすくなります」(佐藤校長)

「スパイラル学習」の一環としてICTの導入も進め、16年度は12クラス中6クラスにプロジェクトを設置した。板書の時間が削減できる分、生徒が考える時間を以前より多く設けられるようになった。画像などを示して解説することも容易になり、生徒の興味を引きつける授業につながっている。また教師間のコミュニケーションも活発化している。

「教科や学年、教職歴などにかかわらず、先生方が自然に集まり、ICTを用いた授業の進め方について話し合う場面がよく見られるようになりました。ベテランと若手が交流するよい機会になっています」(吉岡教頭)

### 生徒一人ひとりの進路を 学校全体で検討する体制の整備

3つめの柱となる「進路指導」では、生徒の進路の選択肢を増やし、高い目標を持たせることに力を入れ、学科ごとの進路検討会を1年生

で1回、2年生で2回行っている。当該学科の教師のほか、校長、教頭、進路指導部の教師、農場長、各学科長が出席し、生徒一人ひとりにつき、定期考査や模試の成績推移、希望進路などを共有。今後の指導の方向性を話し合う。進路指導主事の川上弘先生は次のように述べる。

「学校全体で生徒の将来を考えるために、管理職を含む多くの教師が集まります。そうすることで、進路指導の経験が少ない担任でも、生徒の課題に応じた声かけなどが行いやすくなると考えています」

進路検討会の前後には、ベネッセの「実力診断テスト」(\*4)の結果を活用して、個人面談もしくは三者面談を行う。事前の面談で生徒の希望進路を確認し、進路検討会での検討内容などを、事後の面談で生徒や保護者に伝えるという流れだ。

「生徒には、学習で得た成功体験を生かし、高い目標を持って努力してほしいと願っています。そこで、生徒が本当に進みたい道を見つけられるように、大学進学を含め、進路に多くの選択肢があることを1年生のうちから示しています」(川上先生)

### 先輩の姿から刺激を受け、 学習意欲を高める生徒たち

「出雲農林高校魅力化構想」の成果は、生徒の様子にも表れている。例えば、前述した通り、基礎学力を定着させる生徒が増えている。また、

自分が何をしたいのか、地域にどのように貢献したいのかなど、自分の将来をしっかりと考える生徒が目立つようになった。生徒が成長を遂げ、進路実現を図る姿を見て、地域の中学校では同校の教育内容や進路指導への評価を高めているという。地域からの信頼が強まった結果、入学志望者数が向上し、募集定員上限まで生徒を確保できている。

生徒の進路意識の向上とともに大学進学実績も伸び、17年度入試(推薦・AO入試)では、初めて全学科から国公立大学合格者が出た。

「生徒は、先輩の頑張りから大きな刺激を受けます。大学進学希望者はもちろん、民間企業への就職や公務員を希望している生徒も、学習に積極的に取り組んでいます。本校では、国公立大学合格者10人、公務員合格者10人という目標を掲げていますが、それが達成される日も近いと期待しています」(川上先生)

同校の改革は今後も続く。例えば、17年度には、普通教科・科目と専門教科・科目がどのように関連するかや、高校での学習が将来どのように役立つかなどを明示したフローチャートを作成し、進路指導などで活用する予定だ。

「意義や目的をしっかりと伝え、興味を引きつけられ、生徒は自ら学びに向かうようになります。先生方と今後も工夫を重ね、魅力ある学校づくりを推進していきたいと考えています」(佐藤校長)

\*4 ベネッセの模試「進路マップ」の1つで、教科書レベルを中心に基礎学力を測るテスト。